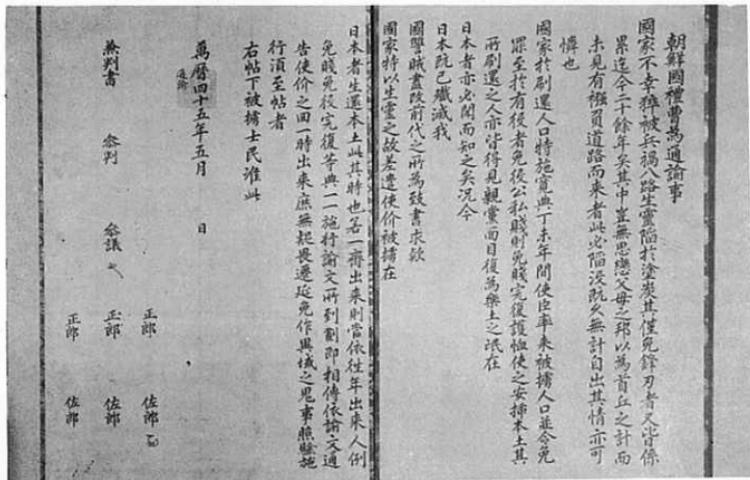


No.10

博物館報



朝鮮國礼曹奉虜刷還論告文

写真説明

文禄、慶長の両戦後、朝鮮との修好交渉は対島島主宗義智（1568～1615）らによって進められた。慶長12年（1607）に朝鮮から呂祐吉を正使として467人の使節団が来朝し將軍德川秀忠に国書を呈したのが正式の修交の始めで、ついで元和3年（1617）に呂充謙を正使として428名の使節団が来朝したのが第2回目である。しかし、これらはいずれも対島で偽造された日本の国書に対する回答使で、日本にいる俘虜を刷還する使命を兼ねた、回答兼俘虜刷還の使節団と解すべきであろう。第2次の使節団は元和3年8月、京都伏見城にいた將軍秀忠に謁し国書を呈し、豊臣氏を亡ぼし国内を統一した賀辞を述べた。この時、同國の礼曹參判尹寿民は、本多上野介正純ら幕府の老臣に書状で俘虜刷還の要求をするとともに、日本各地にいる在日朝鮮人の俘虜に向け帰国をよびかけた。この時の原文書の一つがこの論告文である。内容は刷還の趣旨と、慶長12年の使節とともに帰国した人々の待遇をのべ、この度帰国すれば前例にならないあらゆる特典を与えるので、互にこの論告を伝えて帰国するよう勧めたものである。この書は、当時の実情を物語る原本として日鮮交渉史を究めるうえで極めて貴重な史料である。

目次

朝鮮礼曹奉虜刷還論告文	1
濤・日輪文五枚胴具足	2
野島展から	3
研究講座「有明海の漁撈習俗について」	4
山口亮一画集展について	5
蒼海・梧竹展について	6
県内博物館紹介、唐津城	7
博物館日誌、行事紹介	8

資料紹介

濤・日輪文五枚胴具足

一具足師 宮田家について

この鎧は胸高44cm、兜鉢高さ14cm、前後径23cm、同左右径21cmで江戸中期の当世具足である。胴は鉄銷地、雪の下胴形式で鉄打延五枚胴を栓差でとめ、正面に濤に日輪を大胆に打出している。背面は縦矧板三板を鉄どめにし栓差付錐噺、蝶番付板小鎧を具しさらに相引を覆う蝶番付小板がつけられている。胴の内面はすべて金留塗をほどこしている。兜は62間の筋筋で袖は模頭形鉄板札黒塗3段下り素懸で1段の吹返し。頬当は鉄板打し出しの隆武類で汗流穴1ヶ、中央左右に各々緒便りを打ち、垂は黒漆塗鉄板札5段の素懸。草摺は8間で鉄板札3段下り素懸に仕立てられている。籠手は上肩が鉄板三枚蝶番付の7段下り素懸、1の腕と手甲は蝶番付冠板で覆いそれらを各々鎖撃ぎとしている。諸當は黒漆塗の8本鎧金の鎖撃ぎで山形立拵に菊花文板を鎖撃ぎにしている。佩楯は黒漆塗小波鉄板20枚組合せの菱絞4段下りである。なお兜鉢裏に「享保三年成三月吉 宮田勝貞作(花押)」の銘を打ち胴裏にも「宮田勝貞作(花押)」の銘がある。

宮田家の系図によると勝貞の4代前の貞将は天正の頃、播磨國の宮田に住して仁木姓を宮田と改姓し、鐔や甲冑の製作にあたっており、その子宮田清左エ門尉貞俊(寛永9年没)は秀吉が姫路城の築城にあたった時、召抱えられた甲冑師で城下の田野に移ってその製作にあたっていた。時に「世人はヲ春田ノ細工ト云其後春田ヲ家名トス」と記され、文禄2年秀吉が肥前名護屋に在陣した時、貞俊及び兄の貞行も筑前国に移住し、慶長19年に鍋島直茂が貞俊に扶持米100俵を与え、召抱えている。また鍋島元茂の書状に「西之丸鐵治之儀其方江申付候。守其旨無綴可相調者也 寛永八年六月二日元茂(黒印)晴田清左衛門尉へ」というのがあり貞俊の子、貞通(宮田長左エ門尉 寛永18年没)は



濤・日輪文五枚胴具足

寛永14年鍋島正三の取次で佐賀城下の岸川町で扶持を受けている。これは鍋島勝茂の書状に「佐賀城岸河町之内居敷數五畝二十四歩 比米四斗六升四合之事 令扶助者也 寛永十四年六月二十一日勝茂(黒印)原田長左衛門尉」とある。次に貞通の子、貞次(延宝3年没)に継ぎがなかったため貞次の後を継いだのが、この鎧の製作者の宮田勝貞である。勝貞は貞次の兄、通将の孫にあたる者で、系図書には勝貞(宮田徳左エ門尉)を「春田家中興ノ達人ナリ」と記し、また、「胴ヲ一枚ニ鋪テ或ハ文字或猛勢アリ生類ノ象ヲ打出ス事奇代之良工也」と記している。宝永4年江戸参勤に同行し、江戸で南蛮胴に龍を打出したのを幕府の軍師広瀬実常がみて「古今希ナル鉄ノ鍊奇妙ノ細工也...実ニ三国無双ト云ベキ名人也」とほめたといい、彼の手による火焔打出胴は「前世ニ聞ザレハ後世ニモアルベカラスト」といったい。

甲冑研究書には肥前の甲冑師として宮田派をあげているが、上記の系図の中にみえる「春田」や元茂、勝茂の書状の「春田清左衛門尉」「原田長左衛門尉」から推察すると宮田派は当時奈良の伝統ある甲冑師の春田派の一派として宮田姓を名のっていたのではなかろうか。



雲龍図鍔

銘年七十七歳肥前住勝貞作



鳥居透鍔

銘肥州住勝貞作

野鳥展から

- 昭和47年6月4日から25日まで。
- (月曜休み、通算19日間)
- 三階大展示室。(常設展と併設)
- 観覧者。1,896名(1日平均約100名)

昨年につづいて、当館において2回目の野鳥展であった。約500平方メートルの広い展示室を使って、スクリーニングのある三分の一は映写室、三分の二を展示室として利用した。展示物は野鳥剥製標本98点、生態写真65点、野鳥の解説と野鳥保護パネル12枚その他、シジュウカラ用巣箱4個、カササギ、ホオジロ、セッカ、カラスなどの巣6個、有田町泉山の画家浪養治氏筆「キジ」と「マナヅル」の日本画2点、また林務課から提供いただいた標識板(保護区、休獵区)2枚も展示了。その他、当館が所蔵する河村竜夫氏の寄贈である肥前物産図考も、ウの巣の資料として展示了。



サギ類の標本

剥製標本のうち、伊万里市東山代町長浜干拓で昭和47年2月20日、高圧電線にぶれて死体として入手されたマナヅルの標本は注目される資料であった。この地区は昨年冬も50羽のマナヅル、ナベヅルの群が降りていたことが知られている。剥製にしたツルは2月16日飛来した、約20羽のうちの1羽で、体長105cm、体重5.7kgのオスで、剥製加工。また北山ダムで昭和38年10羽のコブハクチョウを宇部市、常盤公園から譲りうけて飼養していたが、野生犬やキツネの被害、心ない人達によって減少して4羽になっていた。借用してきた標本は、昭和44年7月、弊死したもの。剥製加工した牧瀬氏の所見は、肩の部分に、打撲による内臓が死亡の原因のようであるとのことであった。剥製は大型で、湖上では小さく見えるハクチョウを紹介する資料としては意義深いものであった。(北山ダム湖畔荘の所有。)



肥前物産図考にあるウの巣の図(部分拡大図)

河村竜夫氏寄贈の肥前物産図考にある、タカの巣からヒナをとる図の中に、小さく描かれているウの巣の図は、タカの巣の写生の副的な部分図であって、200年前の馬渡島では、ウの巣を立証する資料として、貴重である。現在では福岡県糸島が、巣の南限だと記されている。

前記した川浪養治氏は、熱心な野鳥観察家で、ホオノキの下にみるニホンキジの姿の絵と、マナヅルの家族の絵は、見事に野鳥の生態をとらえてえがいた日本画である。

NHK寄贈映画「カササギの里」(カラーフィルム)も、毎日午後2時に映写して県鳥カササギの生態を紹介したが、中、小学校生徒だけではなく、一般観覧者にも好評であった。

生態写真は、音成三男、牧瀬馨、福田司の各氏から協力いただいたものであって、美事なチャンスをとらえた姿ばかりで、観客を感心させた。今後も野鳥の一般資料の充実とともに、カメラ愛好の野鳥研究者の応援をえて内容の豊富な野鳥展を企画したいと考える次第である。



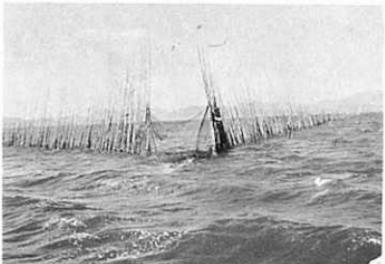
伊万里のナベヅル
(47・2・20採取)

(資料係長・手塚静雄)

第6回研究講座

有明海の漁撈習俗

有明海は、長崎・佐賀・福岡・熊本の4県に囲まれた内海であって、干満の差が著しく、干潮時には広大な干潟が現出し、最深部でもその水深は僅か20メートルにすぎない。しかも、干拓事業によって海面は次第に陸化され、漁場は著しく狭くなっていく傾向にある。水温は気温に左右され易く、また、塩分は降雨に左右され易い。しかし、水面積が狭い割合に、流入河川が多いため栄養塩分に富み、天然餌料が豊富なために稚魚の生育に適している。



有明海のはじ網

有明海には、外洋性魚類で生殖のために回遊していくサワラ・ヒラ・グチ、餌を求めて回遊してて長期間滞留するハモ・サヨリ・マボロ・スズキ・クロダイ・ヒラメ、定住的に棲息している沿岸性のアカグチ・メナグなどの魚類が棲息しているが、アゲマキ・アサリ・カキ・ハイ貝などの貝類も豊富に棲息している。

これらの魚貝類を捕獲するための漁撈法や漁撈用具には、有明海の特性とそこに棲息している魚貝類の種類とによって、特色あるものが発生し伝承されている。漁撈法は大別して、干潟漁撈と沖合漁撈とに分類されるのであるが、それに、カキ・アサリ・モガイ等の貝類とノリなどの養殖業があげられる。

養殖業は、内海の狭い漁場を舞台とする有明海漁撈に、活路を開かせるものであるが、その歴史は新しいイデコと呼ばれている養殖場は、沿岸からアゲマキ・マガキ・アサリと住む江ガキ・モガイの順に沖に向かって設けられている。アゲマキとアサリの養殖は明治年間、モガイとマガキは大正年間の初めごろ、浅草ノリの養殖は明治年間の終りごろから一部では試験的に行なわれたこともあるが、戦後急速に発達した養殖業である。

干潟漁撈は、干潮時に干潟や干潟の中を流れるエゴ

を舞台として行なわれるものであって、その漁撈法や用具など最も風土色に富んだ原始的なもので注目される。押板や押桶は、干潟上を進行するための唯一の道具であり、また、獲物や漁撈具を運搬するためにも欠くことのできないものであって、42年9月にNHKが行なった押板競技会の記録では、押板による干潟上の進行記録400メートル3分10秒であった。

有明海の名物として賞味されているムツゴロウの捕獲には、板鐵を用いるホリムツ・ツリ(ヒツカケ)・ツキ・タッカボの他にアバ・チツットスキなど各種の方法がある。ホリムツは、重労働を伴う上にムツ孔を追う熟練が必要であり、7メートル余り離れたところから干潟上を匍匐しているムツゴロウを長い竹竿の先についたハリにひっかけて捕獲するムツツリは、極度の熟練を要する名人芸の一つで、素人では不可能である。タッカボは、棲息孔内にいるムツゴロウが孔外に飛び出す習性を利用して捕獲するもので、装置も簡単で技術も要しない。これは、最も新しい方法であって、戦後27年ごろから始められたものである。

フラスボカキ・ウナギカキ・アゲマキツリ・シャツバム・メカジカヒキ・ウミタケねじなど、極めて風土色に富む漁撈法が干潟上には展開されている。

沖合漁撈には舟が用いられるが、潮流を利用して行なわれるものが多く、その主体は網漁である。網漁には、敷網・定置網・かし網・流し網・まきあみ・投網・手網などの種類がある。敷網の中には、待網・手押網・じぶ・もじあみ・あんこう網などがあるが、すべて潮流の方向に網をすえて、潮流に乗ってくる魚類を捕獲するものである。定置網には、はじ網・あば・たてばし網などがあるが、有明海の網漁の中では最も規模の大きい漁撈法であって、潮流に向けて漏斗状に左右各々200メートルの長さに竹はじを立てて潮流にのってくる魚類を捕獲するはじ網をはじめ、すべて潮流を利用するものである。まいお網・くちぞこ網・くらげ網・みえ網などのかし網は、潮流と直角に網を張り潮流にのってくる魚類が網の目にさきるようになったさし網となっているが、くらげ網は、さし網となっていない。げんしき網・このしろ網・すずき網などは流し網であって、おもりとうきをつけた数百メートルに及ぶ網を潮流と直角の方向に流していくもので、その多くは網の目に魚がささるさし網となっている。

網漁の他に冲合では、たこなわ・あなごかご・うなぎなわ・はぜなわ・さよりなわ・かにかごなどのべなわや貝類をとる貞けた・ながじれんなども行なわれていて、狭い有明海の漁場にも驚くばかり多くの漁撈が入り乱れて行なわれているのである。

(副館長 木下 之治)

特別企画展紹介

1. 山口亮一画業展

会期 9月6日～9月15日

会場 佐賀県立博物館大展示室、中展示室

主催 佐賀県教育委員会、佐賀県立博物館

山口亮一は1880年（明治13年）佐賀市赤松町城内（現県体育館）に中野致明（鍋島藩家老）の二男として生まれた。6才の時佐賀市与賀町精の藩医山口亮橘氏の養子に迎えられ山口家を相続した。

勤興小学校で義務教育を終え佐賀中学に進学したが、父は家業の医者を継がせるため令兄中野禮四郎氏（早稲田中学校長）の早稲田中学に転校させたが本人は絵画研究に余念がなく渦池研究所に通い、黒田清輝について洋画を学んだ。東京美術学校に入学したのは

明治39年（1906）
で26才の時であつたが在校中の成績は常に群を抜き、特に1910年、在学中に文展初入選し翌年明治44年（1911）同校を首席で卒業した。郷土出身の画家、成富独幽や小代為重久米桂一郎などは何れも血縁の間柄であることと思ひ合せると芸術家と

して洋画の道を歩いたことはその天分に従つたものと云えよう。

卒業後は、中央にとどまって彩管を發揮するよう各方面から要望されたが、彼は養家を守り、父母への孝養を思い帰郷してただ黙々として画業精進の道を選ん



「はちのざくろ」 昭42

だ。
大正2年には佐賀美術協会を創設して会の代表者としてその運営に当たり、半世紀にわたって郷土

美術の振興と発展に尽瘁したことは郷土画壇にとって記念すべき功績といえよう。

なお、大正10年から佐賀師範に奉職して20余年間、佐賀県教職員の養成と指導に専念しました旧制佐賀高等学校、県立佐賀高等学校にも教鞭をとった。

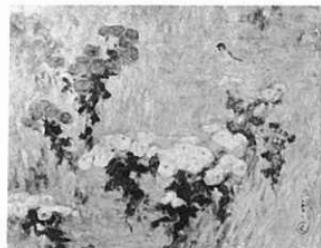
更に佐賀洋画研究所を開設して後進の指導にあたり数多くのすぐれた画家をその門から輩出したことも忘れてはならないことであろう。

以下に残された作品のおもなものを挙げる。

わら屋(P. 12号)	文展初入選	明治43年 (1910)
薔薇と虞美人草	文展入選	大正2年 (1913)
花三種	"	大正3年 (1914)
白い芍药	文展入選	大正4年 (1915)
鉄砲百合	帝展入選	大正7年 (1918)
株切り	(100号)	大正8年頃(1919)



「自画像」 昭48頃



「雀の菊花」 昭42

燈下の静物	帝展入選	大正9年 (1920)
菱壳り娘 (100号)		大正10年 (1921)
鳥と子供 (100号)	帝展入選	大正11年 (1922)
みどりの庭 (100号)	"	大正15年 (1926)
菊	帝展無鑑査	昭和3年 (1928)
薔薇	"	昭和12年 (1937)
爛漫	"	昭和14年 (1939)
山路	"	昭和15年 (1940)
末頃	"	昭和40年 (1965)
種		昭和41年 (1966)
ざくろ		昭和42年 (1967) 絶筆

2. 蒼海・梧竹展

主催 佐賀県立博物館

会場 佐賀県立博物館

会期 昭和47年10月10日～11月7日（会期中無休）

佐賀県が生んだ明治の元勲であり、書家である副島蒼海（1828～1905）と近代日本の代表的書家である中林梧竹（1827～1913）は、ともに同郷の士として、また書家として深い親交があった。今回の展覧は、この2人の書家の遺作を広く県内外にもとめ、未発表資料、新発見資料をも含めてその代表的作品を紹介し、あらためて蒼海・梧竹の偉業を見直すとともに、広く一般の観覧に供する目的で企画したものである。



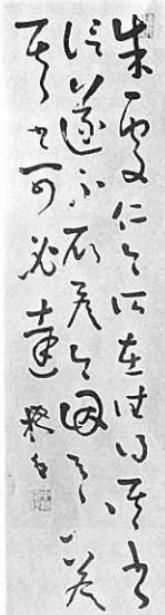
蒼海、書

出品物としては、蒼海、梧竹の作品（かな、古文、篆書、隸書、楷書、行書、草書、画）ならびに拓本、遺品（印章、硯、筆その他）のうち、蒼海関係約100点、梧竹関係約150点を予定（会期中2回展示品の入れ替えを行なう。）しており、ほか2人の全書歴を明らかにする内容となっている。

また、会期中に出品物の写真入り解説書（図録）を発行するとともに蒼海・梧竹の書に関する講演会を開催する予定である。



梧竹、書



梧竹、書



蒼海、書

県内博物館案内

その3

唐津城

- 所在地 佐賀県唐津市東城内8の1
唐津域管理事務所、TEL唐津局2-5697。
- 交通の便 筑肥線東唐津駅下車、東唐津駅より徒歩15分。
- 休館日 12月29日から12月31日まで、そのほか臨時休館することがある。
- 入館料 小人（4才～14才）40円・大人（15才以上）80円・団体30人以上2割引。
- 開館時間 午前9時～午後5時（庭園は10時まで開園）
- 所長 坂本知生
- 設立の経緯と特色

唐津城は藩主寺沢志摩守広高が九州の諸大名の援助を受け、名護屋城の解体資材を用いて、慶長13年（1608年）に完成した松浦潟に面する城である。城は本丸・二の丸・三の丸とによって構成され、現在でも残っている石垣によって当時のものおかげを知ることができる。明治9年本丸跡は現在の舞鶴公園として解放され、唐津市民はもとより、唐津地方を訪れる観光客の憩いの場として利用されている。

昭和41年10月ごろ天守台跡に文化・観光のシンボルとして、慶長様式を取り入れた5層の天守閣が新築され、1階から3階までを「郷土博物館」として、唐津地方の考古・歴史・工芸資料を主体に展示し一般に公開している。4階から5階は展望所で、虹の松原や松浦川、弥生時代における大陸文化の門戸松浦潟が一望される景観は圧巻といえよう。

この博物館の展示室は3室より成っており、1階が郷土資料室で唐津地方の平安時代より明治時代までの歴史資料を展示しており、唐津城や名護屋城に関する資料が豊富に公開してある。2階が考古室で先土器時代から奈良時代までの考古遺物約2000点が展示され、中でも松浦川流域に栄えた末、盧国を推察できる青銅製品や石劍等は当館の代表的資料ともいえよう。3階は美術工芸室で朝鮮渡来の技法でつくられた唐津焼が一堂に陳列されている。

当館は唐津域管理事務所が管理し、商工観光課の所管となっている。

所長1名、副所長1名、事務職員1名、事務補助員5名、業務職員5名。

● 施設

松浦川の河口、標高43mの満島山の頂上に一段とそびえている唐津城内にある博物館である。

敷地面積（天守台）132,916m²、建坪 1838.67m²



事務室 130.0m² 1階展示室 425.08m² 2階展示室 425.08m² 3階展示室 222.24m² 4階展望室 120.48m² 5階展望所 49.95m² 収蔵庫 238.19m²（別棟）、地下収蔵庫 84.9m² 茶室 140.01m²（別棟）

- 主要展示品
 - （1階展示室）
 - 名護屋配陣の図・豊太閤寄進状・秀吉朱印状等名護屋城に関する資料
 - 青江吉次（国指定重要文化財）、2代忠広、3代忠吉等美術刀剣
 - 松浦党関係資料
 - 松浦記集成・松浦古事記・肥前物産絵図等民俗資料、その他
 - （2階展示室）
 - 尖頭器・細石器・台形石器等先土器時代関係資料
 - 押形文土器・曾畠式土器・块状耳飾・石鉄・石斧・石匙等繩文時代関係資料
 - 宇木汲田遺跡出土一括遺物（国指定重要文化財）・石劍・貝釧等弥生時代関係資料
 - 鏡・勾玉・管玉・鉄刀・杏葉・経筒・藏骨器等古墳・奈良時代関係資料 その他
 - （3階展示室）
 - 叩き青唐津壺・朝鮮からつ茶碗・斑唐津四方皿等岸岳系古唐津関係資料
 - 黒唐津船徳利・奥高麗茶碗・天目茶碗・朝鮮唐津徳利等松浦系古唐津関係資料、その他

（学芸課 森 醍一郎）

博物館日誌

6月15日	東京・鍋島直泰氏より鍋島家歴代の佩刀および磁器鳥籠など85点の寄託を受ける。	7月24日	長崎県立美術博物館から松尾館長ほか3名来館
7月2日	昭和47年度第3回博物館教室	7月26日	山口亮一画業展実行委員会
7月4日	「有明海・玄海漁撈道具展」開場（大展示室で7月25日まで）	7月28日	河村龍夫氏より松本佩山の遺作「軸裏紅金彩鯉文皿」の寄贈を受ける。
7月16日	昭和47年度第4回博物館教室	7月30日	昭和47年度第4回博物館教室
7月18日	第6回博物館研究講座「有明海の漁撈習俗について」講師 副館長 木下之治氏 〃〃 河村龍夫氏来館	8月4日	「土生・久蘇遺跡展」開場（大展示室で8月25日まで）
7月19日	河村龍夫氏より青木 繁の遺作絵画9点の寄託をうける。	8月5日	第7回博物館研究講座「土生遺跡の考古学上の価値について」 講師 副館長木下之治氏、学芸員木下巧氏、同森醇一朗氏
7月22日	池田知事、国体委員・日本体育協会九州代表理事安川 寛氏を案内して来館	8月6日	昭和47年度第5回博物館教室
		8月13日	〃 第6回博物館教室
		8月20日	〃 第7回博物館教室

行事お知らせ

事業名	月 日	曜	時 間	内 容
常設展	9・30 まで		9.00～ 16.30	佐賀県の地質時代から現代までの自然史資料や考古、歴史、美術工芸の資料を系統的に展示して本県の歴史と文化の特質の理解に資する。
山口亮一 画業展	9・ 6 ▼ 9・15 金	水 ▼ 水	9.00～ 16.30	本県美術協会育ての親として、また、本県美術教育の発展のために生涯をささげられた故山口亮一画伯の業績をしおり、本県美術の向上に資するためその回顧展を催す。
理科作品展	9・23 ▼ 10・ 4 水	土 ▼ 水	9.00～ 16.30	県下小・中・高校児童・生徒のすぐれた理科作品を展示し、児童・生徒の科学に関する創意的研究的才能の育成と向上をはかるとともに、広く一般の観覧に供し、科学教育に対する理解を深める。
蒼海・樅竹展	10・10 ▼ 11・ 7 火	火 ▼ 火	9.00～ 16.30	佐賀県が生んだ明治の元勲であり、名書家であつた副島蒼海と、書聖とまで仰がれている中林梧竹の代表的な書および遺品 250点を全国から集めて展示公開し、その業績をしのぶ。

◎博物館教室だより

当館では、中学生と高等学校生を対象として、本年度前期の博物館教室を5月から8月にかけて10回開催しました。内容は下記のとおり考古と歴史部門に限定し、当館の職員が指導に当りましたが、7月23日には佐賀市教育委員会が実施している佐賀市金立町大門遺跡の発掘調査に参加して、発掘の体験をいたしました。この博物館教室に参加したのは、佐賀西高・佐賀工業・佐賀農芸・佐賀北高・白石中・川副中・三日月中・三根中・城西中・上峰中など10校の生徒約40名で、他に浜玉中の生徒6名が1回だけ参加しました。

昭和47年度前期 中・高生博物館教室日程表

回	月 日	曜	教室名	内 容	担 当
1	5・ 21	日	考 古	考古学は、どういう学問か	木下之
2	5・ 28	日	考 古	先土器時代について	森
3	7・ 2	日	歴 史	古代の寺院と仏像	木下之
4	7・ 9	日	考 古	繩文時代の遺跡と遺物	森
5	7・16	日	歴 史	末法思想と経塚	木下之
6	7・23	日	考 古	弥生時代の文化と社会	木下之
7	7・30	日	歴 史	佐賀藩と長崎警備	尾 形
8	8・ 6	日	考 古	弥生時代の住居と墓制	木下巧
9	8・13	日	歴 史	日本刀の見方	浜 野
10	8・20	日	考 古	弥生時代の土器と金属器	木下之

後期の博物館教室については、まだ具体化していませんが、内容や受講対象者等について、ご意見やご希望等がありましたら、ご連絡くださいるようお願いします。

博物館報 第 10 号

発行年月日	昭和47年9月1日
編 集	古賀秀男
発 行	佐賀市城内一丁目15~23 佐賀県立博物館
印 刷	佐賀印刷社